2025年1月26日　説教「いま泣く者は幸いです」

ルカの福音書6章20〜26節

12弟子が使徒に選ばれ、イエスの宣教はいよいよ本格的になっていきます。山を下ると、多くの人々があちらこちらから集まってきました。主は人々の苦しみと悩みに伴われました。今朝の箇所は、それに続ききますが、弟子たちへの教えの部分となります。

１．幸いな人々（20〜21節）

①貧しい者は幸い（20）**イエスは目を上げて弟子たちを見つめながら、話し出された。「貧しい者は幸いです。神の国はあなたがたのものだからです。」**

弟子たちにイエスは話し出されました。「貧しい者は幸いです」。すぐに、マタイ伝５章の山上の説教の冒頭を思い出すことでしょう。そこには「心の貧しい者は幸いです」とありました。こちらでは「貧しい者は」とあり、似ていますが、内容が異なります。ルカ伝では直接的に経済的な貧しさについて語っているのです。「心の貧しさ」は神の前の謙虚さがその意味でしたが、経済的な貧しさが幸いとなると何故なのでしょう。

②飢えている者は幸い（21）**「いま飢えている者は幸いです。やがてあなたがたは満ち足りるからです。」**

２１節は前の節の延長にあって、かなり具体的です。「いま飢えている者は幸いです」とは、かなり深刻さがあります。ただ貧しいというのではなく、目の前の食事に事欠いている状態です。お腹が空いて、どうにもなりません。しかし、その人を幸いとはどういうことでしょう。「やがて満ち足りるからです」というお言葉は、希望の光を見いだすことでしょう。

③泣く者は幸い（21）**「いま泣く者は幸いです。やがてあなたがたは笑うから。」**

どのような理由であったとしても、「いま泣く者は幸いです」とあります。マタイ伝の方では「悲しむ者は幸いです」とあって、一脈通じます。泣くからには、原因があるでしょう。持っている物を失った人、愛する人を失った人、目指していた道が閉ざされた人・・。悲しみ、泣いている原因は様々です。しかし、イエスはその向こうにあるところの「笑い」を示されるのです。心の奥底が温まらないと笑いは生まれません。

２．迫害を受ける人々の幸い（22〜24節）

①憎まれるときは幸い（22）**「人の子のため、人々があなたがたを憎むとき、あなたがたを除名し、辱め、あなたがたの名をあしざまにけなすとき、あなたがたは幸いです。」**

「人の子」とは異邦人の光であるキリストのことです。キリストのゆえに、人々に憎まれ、排斥されること、蔑まれること、汚名を着せられることなどがあった場合、幸いだとイエスは言われます。マタイ伝の方では「義のために迫害されている者は幸いです」に続いて「わたしのために、人々が罵り、迫害し、悪口雑言するときに幸いだ」と言われています。

②喜びなさい（23）**「その日には喜びなさい。おどり上がって喜びなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。彼らの父祖たちも、預言者たちに同じことをしたのです。」**

そのような時には、がっかりしたりするのではなく、むしろ、「喜びなさい」「喜び踊りなさい」といわれます。確かに地上ではつらくても、天においては大いなる報いを受けるからと。そして、だいたい迫害する者たちの父祖たちも、御言葉を真っすぐに語る預言者にそうしてきたのだと伝えられます。

③富む者は哀れ（24）**「しかし、あなたがた富む者は哀れです。慰めをすでに受けているから。」**

今度は逆に、富む者は哀れですと。「哀れ」は「不幸」とか「災い」とも訳されています。なぜかというと、彼らは地上において既に受けてしまっているからだというのです。

３．哀れな人々（25～26 節）

①食べ飽きている者は哀れ（25）**「いま食べ飽きているあなたがたは哀れです。やがて飢えるようになるから。」**

いまお腹をいっぱいにしている人々も哀れだといいます。なぜなら、その人に待っているのは飢えるようになるからだといわれます。ここでは、「食べ飽きている」という訳は適切で、豊かでも感謝をもって、それが当たり前ではないのだと悟って食事するならば、その人は守られるのです。「すべてのことを感謝しなさい」（Ⅰテサロニケ 5:18）という信仰の心が大切です。

②いま笑うものは哀れ（25）**「いま笑うあなたがたは哀れです。やがて悲しみ泣くようになるから。」**

いま笑っている人も哀れなのは、やがては悲しみ泣くことになるからだと言われます。これも、いま笑うことができるのも、神の恵みであるのだと感謝することが大切だと言われます。これも「いつも喜んでいなさい」（Ⅰテサロニケ 5:16）にある信仰の心をもって喜び、そこに笑いがあるならば、それは神の御手のなかにあることです。

③人がほめるときは哀れ（26）**「みなの人がほめるとき、あなたがたは哀れです。彼らの父祖たちも、にせ預言者たちに同じことをしたのです。」**

ほめられることはうれしいですし、ほめることも大切です。しかし、主イエスは敢えて言われます。「みなの人がほめるときは哀れである」と。その理由は、かつてイスラエルの民の父祖たちも、偽預言者達におべっかを使い、自分たちの都合の良いメッセージをもらおうとしていたからと言われました。

《結論》

今朝の聖書箇所を読まれた方はすぐに、これは「山上の説教」（マタイの福音書 5～7 章）の並行記事だと思われたかもしれません。しかし、語られた時の状況は異なっています。マタイの方は山上で弟子たちと群衆に語られていますが、ルカの福音書 6 章では山を降りてきて平地で語られています。これは明らかに、同じような教えが二回イエスによって語られたと読むべきでしょう。。

20 節から 26 節までには、四つの幸いと、四つの哀れ（災い）が述べられています。幸いのほうは、①貧しい者②飢えている者③泣く者④憎まれたりする者、が示されています。哀れの方は、①富む者②食べ飽きている者③いま笑う者④褒められる者、が示されています。 こう並べてみればすぐにわかるように、私たちが普通に幸いであると考えていることと反対であり、その反対に私たちが普通に災いだと考えていることと反対のことが述べられています。

こんな教えは現実離れしていると言われる方があるでしょう。例えば、アフリカの人々は貧しくても幸せだ、優しいというような言い方をされると反発し、劇的にストーリーを作っているなどと批判する向きがあり、一面で理解できます。貧しさは不便だという言葉も確かにそうだなとも思います。

しかし、イエス・キリストが言われることは、証しされています。ヨセフの人生を思い出してみましょう。兄たちに売られてしまったことやポティファルの家で誤解されて投獄されたことはその時点では不幸とも思えたかもしれませんが、それらのことが用いられて彼はエジプトの総理大臣になり、飢饉の時に父や兄たちを迎えることになります。

星野富弘さんの詩に「よろこびが集まったよりも 悲しみが集まった方がしあわせに近いような気がする、 強いものが集まったよりも弱いものが集まった方が 真実に近い気がする、 しあわせが集まったよりも ふしあわせが集まった方が 愛に近いような気がする」というのがありますが、四肢が動かなくなり、唯一動かせる口に筆をくわえて記した人の実感は尊重したいです。

かつて、日本宣教に貢献した J.C.ヘボンはニューヨークで開業医として成功していました。しかし、福音宣教がなされていない国々の人々への情熱のために、44 歳の時に長老教会の宣教師として来日しました。その時、年老いた父と 14 歳の息子サムエルを残して、出発しました。弟への手紙に「これが私の遭遇する最初の別離であり、最も耐えがたい試練でもあります。ほとんど胸も裂けんばかりの悲しみでもありました。しかし私は、主なる神を信じております」と記しています。彼の働きを通して、日本の西洋医療が進みました。明治学院などの学校もできました。ヘボン式ローマ字もできました。そして、イエスさまが広く伝えられました。

ステパノを始めとする殉教者の証しや、ヨセフ、星野さん、ヘボンの実例をみても、幸いとは主なる恵みや愛を大切にし喜んで人々です。今、何らかのことで泣いている人がいるかもしれません。悩み苦しんいる人がいるかもしれません。しかし、キリストはそこにいて下さいます。いま、キリストのゆえに、何か犠牲を受けている人がいるかもしれません。そういう方にキリストは、幸いですよ。必ずともにいますよと励ましてくださっています。世の幸せの基準にとらわれず、どんな時にも主の恵みは豊かなのだと信じましょう。あなたの今週の歩みにも、主からの幸いを見る眼が与えられていきますように。